

北海道支部会報

-特集 「人」を育む -

日本細菌学会北海道支部

2013年12月 第22号



編集・発行：日本細菌学会北海道支部

目次

<第 80 回日本細菌学会北海道支部学術集会報告>

・ 第 80 回日本細菌学会北海道支部総会を終えて

東京農業大学生物産業学部食品香粧学科 丹羽光一、相根義昌、渡部俊弘 4-6 ページ

・ 第 80 回日本細菌学会北海道支部学術総会 最優秀賞を頂いて

帯広畜産大学 動物・食品衛生研究センター食品有害微生物分野 楠本晃子 7 ページ

・ 優秀発表賞受賞にあたって

帯広畜産大学畜産衛生学研究部門 山崎栄樹 8 ページ

・ 日本細菌学会北海道支部会 優秀賞を受賞して

北海道大学大学院保健科学院 博士課程2年 石田香澄 9 ページ

-特集 「人を育む」-

・ 酪農学園大学創立者 黒澤酉蔵先生について

酪農学園大学獣医学群食品衛生学 田村 豊 11-14 ページ

・ 大学と人の心をはぐくむということ

北海道大学医学研究科医学教育推進センター 小華和証志 15-16 ページ

<お知らせ>

・ 北海道で「細菌学若手コロッセウム」やります

北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター感染・免疫部門 大西なおみ 17-18 ページ

<研究室紹介 >

・ 北海道大学人獣共通感染症リサーチセンターの活動

北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター国際疫学部門 鈴木定彦 19-20 ページ

・ 研究室紹介

札幌医科大学医学部微生物学講座 横田伸一 21-22 ページ

・ 研究室紹介 北海道文教大学人間科学部

北海道文教大学人間科学部健康栄養学科 木村浩一 23-24 ページ

<会則>

25-26 ページ

<日本細菌学会北海道支部学術総会歴代開催記録>

27 ページ

<日本細菌学会北海道支部 平成 25-27 年度新役員・名誉会員名簿>

28 ページ

<編集後記>

29 ページ

<第 80 回日本細菌学会北海道支部学術集会報告>

第 80 回日本細菌学会北海道支部学術総会を終えて

東京農業大学生物産業学部
食品香粧学科
丹羽光一、相根義昌、渡部俊弘

本年度 8 月 30 日、31 日に、第 80 回日本細菌学会北海道支部学術総会が東京農業大学生物産業学部で開催されました。おかげさまで一般演題数は 32 という数が集まり、講演や懇親会を中心に、大会中は活発な議論と交流が交わされ、成功裏に終わったものと自負しております。これもひとえに参加者の皆さんが会を盛り上げてくれた結果と、心より感謝致します。誠にありがとうございました。

本大会の総会長は私丹羽となりましたが、生物化学研究室の渡部俊弘教授、相根義昌准教授とがまさに三位一体になって大会の準備を進めて参りました。本年 3 月ころより、日程や会場など、総会の開催について議論をし始めましたが、やはり心配だったのは「どれくらいの方に来て頂けるのか」ということです。なにしろ網走で開催されたのは 9 年ぶり、ここのところ支部会はほとんど札幌で開催されております。昨年度の開催地は帯広でしたが、帯広は単純に札幌から約 200 km、それに対して網走は札幌から 350 km という離れた場所にあります。「遠いからちょっと・・・」と考える方もいれば、「せっかくだから観光をかねて・・・」と、むしろ積極的に来てくれる方もいるかもしれない、などいろいろ思いを巡らしましたが、正直なところ、あまり演題が集まらなかったらどうしよう、という不安が続きました。結果としては前述のとおり 32 の演題を登録して頂いたわけですが、あまり心臓によろしくない日々を過ごした、というのが本当のところ。皆様のおかげで演題が多数集まったときの私どもの喜びをお察してください。

また、大会開催地である東京農業大学生物産業学部が、網走の市街地から離れた大観山の山中にある、というのも懸念材料でした。施設自体は大きさ、設備ともに問題ありませんが、市街地からの公共交通期間はバスしかなく、それも便数があまりありません。交通の便はあまりよくないのが事実です。大会開始の時間帯、終了の時間帯をどうするか、また懇親会をどこで行うかなど、考えることはたくさんありました。最初のうちは、講演会場や懇親会を網走市街地とすることも考えました。しかしせっかきでもらうのだから、やはり農大は見たいし、市の皆さんの協力も仰げば懇親会も食堂で出来るだろう、と、結局は大学で開催となりました。バスの時間など、極力配慮したつもりではございますが、ご不便をおかけしたかもしれません。しかし、やはり大学で開催してよかったと思っております。手前味噌ではありますが、道東網走にもこのような立派な学府があるのだ、ということ、細菌学会支部会の皆さんに知って頂けたことは、今回の大会の大きな意義の一つだと考えているからです。

さて、物理的な心配事などを書きましたが、もちろん一番心をくだいたのは、本筋であります「第 80 回学術総会の主旨」です。支部会の会則にもあるとおり、学術総会の目的は細菌学領域の進歩を促進することにあります。しかし、東京農業大学の食品香粧学科に所属する私どもが主宰するからには、やはり農大らしい大会



にしたい。細菌学は「農学」のひとつでもあるのだということを再認識できる大会にしたい、と思った次第です。このために、特別講演で特色を出そうということになり、この企画には特に渡部教授に尽力して頂きました。

東京大学農学部元教授であり、現在は東大名誉教授で中国南西大学生物エネルギー・生物修復研究センター長を務めておられる五十嵐泰夫先生に「バイオマス利用の夢と現実」を講演して頂きました。五十嵐先生は現在中国と日本を行ったり来たりの大変ご多忙な生活をしておられますが、農学における細菌学の重要性と可能性を支部会で是非聞かせて頂きたいこと、そして先生の夢のある研究を農大の学生や網走市民に紹介したいことをお伝えしたところ、講演を快諾して頂きました。座長をしながら聞いておりましたが、バイオマスの本質的な意味を理解することが日本にとって重要であること、そして「北海道」がバイオマスの拠点として大きな可能性を秘めた地域である、というお話に感動した次第です。



日本メナード化粧品株式会社の赤座誠文先生には「皮膚常在菌」の題目で講演して頂きました。学術総会冒頭の挨拶でも述べたのですが、私、渡部教授、相根准教授の所属する生物産業学部食品香粧学科は、食品や化粧品の加工開発を研究する学科です。香粧品科学は実に奥の深い分野で、化粧品を塗る「皮膚」もその研究分野となっています。そこで、「食品香粧学科」らしく、化粧品が用いられる「皮膚」と「細菌」の関係について特別講演をして頂こうということになりました。皮膚には細菌がたくさん住んでいる、という話はよく聞くことですが、講師の先生を探すにあたり、皮膚常在菌について研究をされている方はあまり多くない、との印象を持ちました。赤座先生自身にうかがったところ、実際、皮膚常在菌を専門にしている研究者は非常に少ないとのことでした。また自画自賛になりますが、今回の講演はとても貴重な話だったのでないかと思います。



当学科の中川純一教授には、「微生物の長寿遺伝子」と題して講演して頂きました。中川先生には酵母の研究が我々人間の健康にも寄与していること、そしてワインの芳醇な香りは細菌が生み出していることなど、食品香粧学科を代表してお話して頂きました。また「熱処理の COMSOL Multiphysics 有限要素解析」と題し



たテクニカルセミナーを計測エンジニアリングシステム株式会社の橋口真宜先生にお願いしました。コンピュータシミュレーションを用いて食品の細菌フローラの増殖を予測できるなど、新しい細菌学の可能性をご理解頂けたのではないのでしょうか。

一般口演では、これは毎回のことですが活発な議論が交わされ、北海道支部会の学術レベルの高さが再認識できました。特に学生や留学生の発表が年々増えているのは望ましいことだと思っています。

懇親会では、網走ちゃんぽん研究会、株式会社 idea north 44°に全面的な協力を仰ぎ、網走の食材をご賞味頂きました。せっかく網走にお越し頂いた会員の皆さんに、少しでも網走の食の豊かさを知ってもらいたいと、協力をお願いしたのですが、網走ちゃんぽん研究会、株式会社 idea north 44°の「網走を好きになってほしい」という思いは総会主催者である我々以上に強く、私が言うのも僭越ですが、豪華で美味しい食材と「おもてなし」を提供して頂きました。網走の「人」と「食」の豊かさをご理解頂けたのではないかと自負しております。

思いつくままに文を書き連ねてきましたが、今回の学術総会を開催するにあたっては、実にたくさんの企業や団体のご支援を賜りました。ここに協賛を頂いた企業・団体に深謝いたします。誠にありがとうございました。協賛を頂いた企業・団体につきましては総会ホームページ <http://www.bioindustry.nodai.ac.jp/~seika/html/wwwsaikin/saikin80.html> に掲載されております。研究や運営に役立つことがきっとあると思いますので、どうかご照覧ください。また総会に参加して頂いた皆様に、この場を借りて改めて御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

来年度、再来年度と、本総会と支部会が益々発展し、会員同士の交流が深まることを祈念しております。



第 80 回日本細菌学会北海道支部学術総会 最優秀賞を頂いて

帯広畜産大学 動物・食品衛生研究センター
食品有害微生物分野

楠本 晃子

この度は、第 80 回日本細菌学会北海道支部学術総会 最優秀賞をいただき、大変感謝しております。今回の受賞は、*Tenacibaculum maritimum* との運命の出会いから始まり、そして、研究に際してアドバイスをくださった先生方、まったく新しいテーマに取り組むことを応援して下さった先生方、試行錯誤の実験の連続に付き合ってくれた研究室の学生さんのおかげで達成できたものと思います。この場を借りてお礼申し上げます。

本研究の主演、魚病細菌 *T. maritimum* とは、今年度から担当することとなった授業の魚病学で運命の出会いを果たしました。元々、私は理学部出身ですので、魚類については基本的な生理学や生態学程度の知識しかなく、また、魚を好んで食べることもないため、魚の名前もあやふやです。ですから、魚病学のメインである魚介類の感染症の知識に至っては皆無に等しい状態ですので、授業の担当が決まってからは、必死に教科書で勉強し、魚の外見と名前を覚えるために、スーパーの鮮魚コーナーに立ち寄り、生協の食堂でも魚の味を覚えるために魚料理を積極的に摂取しています。そんな中、ある日、魚病の教科書を読んでいた時に運命の出会いがありました。『滑走細菌症』—教科書の中にあつたこの言葉は、かつて、大学院生の頃にマイコプラズマの滑走運動のメカニズムを明らかにしようと日夜研究に明け暮れていた私の目を釘付けにしました。『滑走』という言葉に冠した素敵な名前、その病原性について、興味津々で教科書や文献を読み進めていくと、なんとその病原体はその名の通り滑走すること、しかも、その運動メカニズムについてはまだ世界中で誰も研究していないこと、加えて、滑走細菌症の発症メカニズムについてもほとんど研究がなされていないことが分かりました。よく分かっていない病原性の分子メカニズム、そして、未知の滑走メカニズム！これは是非研究しなければ！！と強く思い、今年度から *T. maritimum* 研究を始めるとにしました。

早速、菌株を取り寄せ、次に、大学院の頃の先輩後輩の運動解析のエキスパートの先生方に相談しながら、なんとか基本的な運動解析系を立ち上げることができました。忙しい中、機器選定の相談にのっていただいた上、解析手法などをご教授いただき、大変感謝しています。また、やっと立ち上げた観察系で、元気いっぱいカバーガラス上を滑走する *T. maritimum* の姿を初めて見た感動は忘れられません。

試行錯誤でうまくいかないことが続いた時に相談にのってくださり、アドバイスをくださった学内外の先生方へも感謝の気持ちでいっぱいです。

最後に、新しい研究テーマに挑戦することを後押ししてくれた同研究室の川本恵子准教授に感謝の意を表したいと思います。

まだ研究を始めたばかりですが、これからも日夜 *T. maritimum* の滑走運動と病原性の真理に迫り、これまで支えてくださった方々、細菌学会の先生方、世界中の人たちに、*T. maritimum* の魅力をお伝えしたいと思います。



優秀発表賞受賞にあたって

帯広畜産大学畜産衛生学研究部門 山崎栄樹

この度、第80回日本細菌学会北海道支部学術総会優秀発表賞にご選考頂きましたことに対し、心より御礼申し上げます。あわせて、研究の遂行にご助力頂きました帯広畜産大学・倉園久生教授、長崎大学熱帯医学研究所・平山壽哉教授をはじめとする共同研究者の皆様がこの場をお借りして御礼申し上げます。

本学術総会においては、サルモネラ属菌の病原因子候補物質である *Salmonella enterotoxin (Stn)* の病原性への関わりについて演題名「*Salmonella enterotoxin* はサルモネラ属菌にとって必須の病原因子か？」として発表させて頂きました。ご承知の様に、サルモネラ属菌についてはこれまでに世界中の多くの研究者によって、非常に多角的な検討がなされて参りました。病原性発揮の分子生物学についても全てが明らかされてしまっていると錯覚する程多くの知見が蓄積されております。その中で Stn はエンテロトキシンという名前が示す様に下痢症状発症に重要な毒素として発見されました。しかし、一方でその毒性を否定する論文も発表されており、様々な総説や学術書において「腸炎症状をひきおこす病原因子としてエンテロトキシンが報告されているがまだ決定的なものとなっていない」などと非常に歯切れの悪い表現で記述される事が多いタンパク質となっております。私どもはその様な状況の中で Stn の病原性への関与について明らかにすべく研究を開始しましたが、現在までに Stn が病原性に関与するという事を示すデータは得られておらず、かといって病原性に関与しないという証明は現実的には難しく、解析は難航しているというのが正直なところです。そんな中、今回の学術総会ではプレリミナリーではありますが、Stn の病原性への関与が菌株によって異なる可能性を示すデータをもって発表させて頂きました。今回、Stn に関する研究報告に対してこのような賞を頂きました事は、困難を極める Stn の解析を進める上で非常に励みとなりました。サルモネラ属菌についての総説で Stn の立場が明確に記述される日を夢見て今後もコツコツとデータを積み重ねてゆきたいと思っております。今回同様、今後も皆様にご指導頂ければ幸いです。

私にとって初めて訪れた網走の地で、大変活発な議論に参加させて頂いた事に感謝しております(個人的には東京農業大学と地域産業の連携に大変な感銘を受けました)。最後になりましたが、素晴らしい発表の機会を与えてくださいました丹羽先生、渡部先生、曾根先生およびスタッフの皆様にご感謝致します。有り難うございました。



日本細菌学会北海道支部会 優秀賞を受賞して



北海道大学大学院保健科学院 博士課程 2 年 石田香澄

この度は第 80 回日本細菌学会北海道支部学術総会におきまして優秀賞を受賞させていただき、誠にありがとうございます。北海道支部会賞を受賞することは私の大きな目標でしたので、授賞式にて名前が呼ばれたときの驚きと興奮した気持ちは今でもはっきりと覚えています。このような素晴らしい賞をいただきましたことは私にとって大きな財産であり、これから研究を続けていく上で大きな励みとなりました。この場をお借りして、演題を聞いて下さいました先生方、投票していただいた先生方、日々直接指導していただいています山口博之先生、松尾淳司先生、そして所属している研究室の皆様に厚く御礼申し上げます。

さて私は「ケノムシーケンスから読み解く *Acanthamoeba* 共生細菌 *Neochlamydia* S13 の特徴」という演題で発表いたしました。この研究で対象としている細菌は *Neochlamydia* という細菌学に精通している先生方にとっても馴染みかかないと思われるものでした。クラミジアはヒトに感染し病原性を示す *Chlamydia trachomatis* や *Chlamydia pneumoniae* がよく知られていますが、実は *Acanthamoeba* などの共生細菌として環境中にも広く生息しています。環境中に生息するクラミジアにも様々な種類があるのですが、その中でも札幌の土壌から分離し株化した *Acanthamoeba* S13 株の共生細菌 *Neochlamydia* S13 は一般的なクラミジアの常識とは異なり、アメーバの細胞分裂を利用してアメーバに播種することが私たちの実験からわかってきました。また、その他いくつかの実験結果からも *Neochlamydia* S13 はアメーバと非常に強い共生関係にあることが考えられましたので、ゲノム解析によりこの共生関係を規定する分子についてヒントを得ようと、演題の研究を始めると至りました。環境に生息するクラミジアの研究を行っている私は、もちろんこの研究の面白さや意義を理解していますが、学会発表となりますと初めて *Neochlamydia* という名前を聞く先生方もたくさんいらっしゃいますし、発表時間も限られています。そのような状況で、どのようにすれば興味を持っていただけるのか、それ以前に、研究内容を理解していただくにはどのような発表を行えばよいものか...非常に頭を悩ませました。考え抜いた結果が今回の発表だったのですが、伝えたいことすべてを皆様に理解していただける発表ではなかったと感じております。しかし、この学会発表のために準備した時間は無駄ではなく、とても意義のあるものだったとも思っています。「わかりやすく、興味を引く発表」を目標にすることで、準備の過程において自身の研究内容をより深く理解することができましたし、問題点や改善点をみつけることもできました。また相手に伝えるためには自分自身の理解が深くなくてはいけない、ということも改めて強く認識しました。学会発表の機会には他にもありますが、私は特にこの日本細菌学会北海道支部学術総会を毎年楽しみにしています。それは、アットホームながらも切磋琢磨しているこの支部会をとっても素晴らしい場であると感じているからです。また、若手研究者に平等に与えられる「支部会賞」というチャンスが、研究やプレゼンテーションを充実させようとするモチベーションを上げさせているのかもしれない。来年も先生方の素晴らしい研究に刺激を受けに来ることを楽しみに、私自身もよい発表ができるよう、また 1 年間研究に精を出したいと思います。

-特集 「人を育む」 -



酪農学園大学創立者 黒澤酉蔵先生について



酪農学園大学獣医学群食品衛生学

田 村 豊

今回、山口博之支部長から私が勤務する酪農学園大学の創立者である黒澤酉蔵先生（1885～1982）をご紹介するようにとのご依頼があった。前支部長であった藤井暢弘先生や、鈴木定彦先生、山口博之先生との酒席の会話の中で、しばしば登壇したことを覚えておられたことと推察した。専門とは全く異なる内容でどのように書いたら良いものかと思案するものの、大学にとっては大変ありがたいお話であるので謹んでお引き受けした。貧農の子供として生を受けた酉蔵が多くの人との出会いとキリスト教という宗教により人間的に成

長し、数々の苦難を乗り越えて酪農学園大学を設立した教育者としての素顔を紙面の許す限りご紹介したいと思う次第である。

西蔵は、1885年に茨城県の貧しい農家の長男として生を受けた。生地が水戸光圀公の隠居所の近くで在ったことから水戸学を学ぶ機会があり、「知行合一」の精神を身に付けた。父も祖父も酒で財産を亡くした教訓から、母との堅い約束を守り終生禁酒を貫いた。数え年で11歳の春に尋常小学4年を卒業して、15歳の時に上京した。理由は東京に出てさらに勉強したいということであったようだ。神田教学院の小使い兼給仕として働いていた時に、その後の人生を左右する田中正造翁（1841～1913）と運命的な出会いをする。正造は、第一回総選挙で衆議院議員に当選して以来、その生涯を閉じるまで足尾鉍山の鉍毒から農民・国土を守る闘いに身を投じた人物であった。国会でも何度も論陣を張り、政府の無為無策を追及したが全くの進展が得られなかった。そこで命がけで明治天皇に直訴したが失敗に終わった。当時17歳であった西蔵は、正造の決死の覚悟に感銘を覚え、矢も楯もたまらぬ気持ちで東京において面会をすることとなった。正造の正義感と切々たる人間愛に満ちた人格にうたれ、正造とともに農民の救済に奔走することになった。東京では連日路傍で演説会を開き、義援金を集めては被害地に送っていた。西蔵の行動に対し警察は危険人物とみなして逮捕した。獄中でキリスト教の布教団体が差し入れた聖書との出会いは、西蔵の生涯を貫く行動規範となった。6か月におよぶ未決拘置の末、無罪の判決が下された。西蔵の行く末を案じた正造は苦しい生活の中から学費を工面し、1903年に京北中学に入学させた。卒業と同時に心機一転して北海道行きを決意する。

1905年7月に西蔵は横浜から室蘭行きの貨物船に乗った。札幌に着いた西蔵は紹介者を介して日本の近代酪農の父と言われた宇都宮仙太郎翁（1866～1940）に面会した。仙太郎は同郷の先輩である福沢諭吉に触発され、「独立自尊」の精神を生涯貫いた人物であった。仙太郎に感化された西蔵は、翌日さっそく宇都宮牧場の牧夫として働くことを決めた。早朝からのすべて手作業という重労働で大変辛いものとなったが、寸暇を惜しんで専門書を読み漁った。1906年に西蔵は徴兵され、札幌市月寒の歩兵連隊に入営した。軍隊でもその勤勉さが認められて2カ年で兵役を終えた。その間に貯めたお金を元手に将来の酪農自営を決意した。除隊とともに、投獄中に出会った聖書の導きにより日本メソジスト札幌協会での洗礼を受けた。

1909年4月に山鼻東屯田村の屯田兵将校の居宅と、乳肉兼用種エアーカー1頭を借りて酪農自営の第一歩を記した。西蔵は朝3時に起きて、飼料給与などの牛の管理をこなし、5時には近隣の酪農家から卸してもらった牛乳を荷車で配達して回った。寝る時間が3~4

時間という苦しい生活を続けること5年で乳牛も10数頭に増え、一人前の酪農家としての道を確実に歩み始めた。1915年に小学校教師であった梅江と結婚するも、朝3時から夜10時までの働きぶりは変わることがなかった。

大正末に酉蔵自身が経営拡大のために入手した農地は、開拓依頼の収奪農業によって劣化し非常に痩せたものだった。相次ぐ冷害経験から、寒地農業の基本は酪農を軸とした循環農法であることを確信した。循環農法とは、農業は天（風土・自然条件）、地（その土地の持つ特性）、人（機をとらえた経営能力）の合作であり、地力の増進を基本とした適地適作でなければならないという理念であった。今考えてみても十分に通用する考え方であり、酉蔵の先見性には驚かされる。酉蔵は寒地農業の確立を生涯の使命とするが、北海道の大地を健土とし、適作農業を実施することで冷害を克服することは、正に足尾の鉍毒被害民の救済運動と共通するところが多くあった。

1929年に戦後恐慌がはじまり、また1923年に9月に発生した関東大震災の被災者救済のために食料輸入関税が撤廃されたことにより、乳製品とくに練乳価格が暴落し、乳業界の不振により酪農民は苦しい立場に立たされた。その折に酉蔵らは札幌近辺の酪農家を集めて北海道畜牛研究会を設立した。研究会は酪農民の苦しい局面を打破するため、北海道農業の革新を目指して組合事業、すなわち有限責任北海道製酪販売組合を創設した。酉蔵らは生産から加工、流通まで自らの手で一貫させることによって、付加価値を高め利益を農民に還元させることを実現した。札幌村野津幌の工場バター製造が開始された。工場技師はたった一人で、後の雪印乳業株式会社の初代社長で、酪農学園の理事長にもなった佐藤 貢（1898～1999）であった。1926年に北海道製酪販売組合を組織し、1941年3月に明治・森永の両社を合併して北海道興農公社となり、終戦後の1947年に北海道酪農協同株式会社に改組した。そしてそれが1951年に雪印乳業株式会社に継承された。

北海道農業は改良に改良を加えられたにもかかわらず、総じて凶作、不作に悩まされてきた。そこで酉蔵らは、酪農経営には多くの知識、技術を必要とし、特に道東、道北の冷涼地帯での酪農経営には農業教育が必要との考えに至り、北海道酪農義塾の設立に至った。酪農義塾の精神は、協同組合精神であり、酉蔵は世界協同体の実現を夢見ていた。これは青年時代から一貫して持っていた理想であり、協同組合の思想は相互扶助の精神であり、共存共栄の精神でもあった。

酉蔵は1942年に江別市西野幌に甲種農業学校として野幌機能学校を開校した。酪農義塾の教育方針を踏襲し、全寮制教育による実学教育を教育方針とした。教員を学生とともに生活させ、実力ある農民魂を磨き上げ、腕のある指導者を育成することを目的とした。さ

らに西蔵は、北海道農業をこれまで、デンマーク農業を範とする有畜混合農業を展開し、組合製酪事業を興してきた。しかし、いつも戦争に敗れ、亡国の瀬戸際にたったデンマークを世界の理想国に導いた宗教家で教育者であったグルントヴィの信仰心と「神を愛し、人を愛し、祖国を愛する」の三愛主義を教育のバックボーンにすることを育んできた。そこで野幌機農学校の教育の指導理念をキリスト教の聖書に置くことを決定した。さらに、将来のために酪農の基本的研究が必要であり、それを根拠に置いた具体的指導教育を徹底し、確固たる精神的土壌を築かなければならないと考え、大学の設置を考えた。

1950年4月に文部大臣認可の下、酪農学園大学短期大学が開校した。西蔵は、農業教育については、例え寒冷地帯であっても冷害や凶作の災害に脅かされることのない、天地の経緯に順応した安定農業の基盤である酪農の研究確立を目的とする実践教育であると語っている。その後、1960年に大学設置が認可され、「健土健民」「三愛主義」「実学教育」を建学の精神とするわが国初の酪農学部を置く酪農学園大学が誕生した。

これまで西蔵の大学設置にいたるまでの歴史を手短に紹介した。偉大な先達である人物を筆力の乏しい筆者が書くにはいささか荷が重かった。しかし、この拙文の中にも一人の貧しい農家の出身である人間が多くのかの係りのあった人物に多大な影響を受け、信仰という心の支えとともに人間的に成長していく姿を垣間見ることができよう。ややもすれば人との接触を避ける学生が増えてきている中、人生にも研究にも human network がいかに重要であるかを教える必要性があるようだ。また、人生のさまざまな困難に立ち向かう上で、人間にとって最も重要なことはお金でも物でもなく教育にあるとの信念で大学を設立した先見性にはただただ感服するしかない。今年、酪農学園大学は創立 80 周年を迎えた。今、この大学に身を置くものとして、黒澤西蔵先生が思い描く 80 年後の教育・研究が本当にできているのかと自問自答する毎日である。

参考

酪農学園の創立 黒澤西蔵と建学の精神 酪農学園大学 (2011 年)

大学と人の心をはぐくむということ

北海道大学医学研究科医学教育推進センター 小華和征志

筆が滑りそうなテーマで、不穏当な表現がありましたらお詫びいたします。

少人数対象の微生物学に関する演習を行いながら学生に話を聞くと、バブル期就職で当時、新人類と呼ばれた私は、近年の若者のモラルの高さに驚くことひとしおです。心を育まれているのは教員である私なのかもしれません。

ところで人の心はどのように育めばいいのでしょうか。当然ながら正解はないでしょうが、社会的にポジティブの結果を生むものであるというものでなければならぬでしょう。

すこし話題をずらして、医学教育領域では近年、態度教育が重要とされてきています。またこれに近いものとして、プロフェッショナリズム教育というものがあります。これらの専門家に読まれると睨まれそうですが、「妙なことを言い出す前にすることがあるのではないか？」と昔から思っていました。

病院の狭い渡り廊下を三人の学生が談笑しながら横一列で歩いていました。一人が気づきどけるともう一人が、「声をかければいいだろう。」と追いついた私に曰います。かっとなって、「言われなくても配慮するのが常識だろう、おまえ医師になってもそのような態度で通用すると思うのか？他人への配慮という言葉は頭にないのか？」と振り返りながら怒鳴っていました。

医学生共用試験において、廊下は周りに配慮して隅を歩くことが求められています。（もっとも大学でこれをやると急にドアが開きぶつかることがあります。）態度教育とは、要するに当たり前の配慮が足りない医学生が増えた結果なのだと気がつきました。うまい名称を考えるものです。配慮が足りなくなっているのは、怒られる機会の減少と関係があるのではと考えています。

グラム染色を指導しながら、嫌みをたらたらといわざるを得なくなったのは十数年も前のことです。（染色・脱色の時間を計らないで適当に行う、など。）この様に言いつけ（決まり事、法則、法律など）を守られない行動様式では十分に学習することができず、勉学的能力の低下が起こっていると思われる。

モラルは高いのかもしれませんが、決まりを守る精神も、若者だけではなく社会全体として、低くなってきていると実感します。

ともすると心を育むとは、なにがしかの理想を抱くように仕向けることと誤解されがちではないかと疑問を持っております。現代社会の多様性と言うまでもなく、理想は様々であり、大学でさえ一方で国際化と言い、他方でサスティナビリティと銘打つ。これらは矛盾しないといわれるのですが、パラダイムとしてはやはり行き方が正反対と感じます。

学生を観察する限り、現代は危機的状況と思わざるを得ません。大人（この場合教員でしょうか）は学生を叱りません。叱ることは理想を抱くことではありませんから。ポジティブな思考過程ではありませんから。

結果、学生を叱ると、彼らは真っ青になり、涙ぐみ、視界から消えてしまいます。そんな若者ばかりで

はない、という声が聞こえてきそうですが、彼らのうち上位の1~3割は昔の上位の若者よりも優秀でそちらに目を奪われているために現実が見えないのではないかと推測します。残りの大半の学生には、あまりにも叱られ耐性がありません。他の艱難辛苦に対しても耐性はなさそうに見えます。

「ギリシア時代にも、最近の若い者は、といわれていた。」とされていますが、特定の時代には当てはまらない場合があるのかもしれませんが。

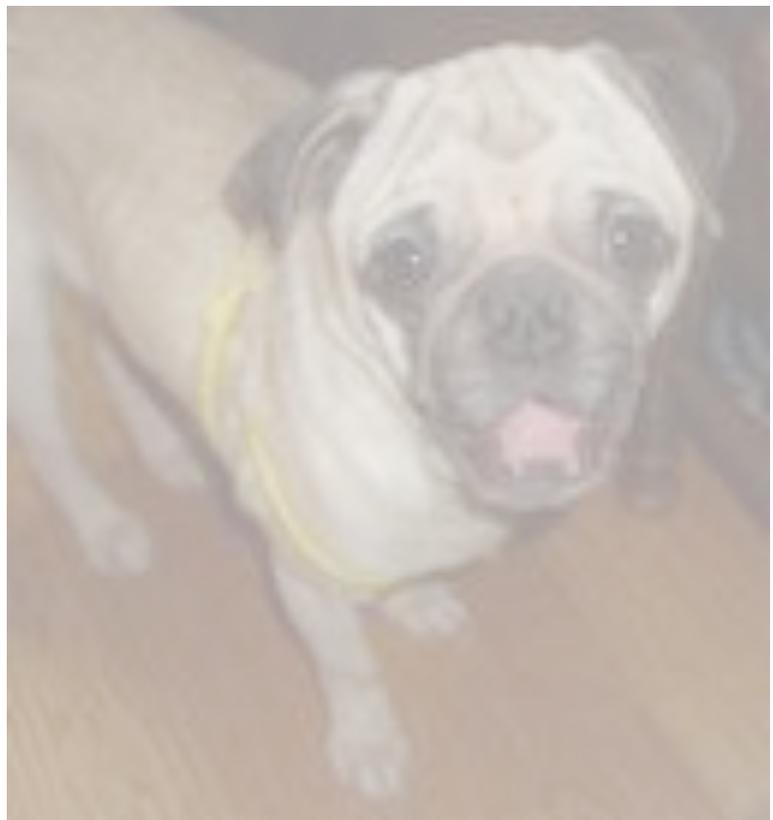
幕末、維新といわれる偉業をなしたメンバーは多くが身分の低い出身でした。司馬遼太郎によると、当時は学習のために語学習得が必須でしたが、身分の高い侍の子弟にはこれを身につけることが能力的（特に忍耐力）に不可能であったため、とされています。おそらく、一般的に教育を受ける上流層の能力低下が著しかったのでしょう。もしかすると現代日本もこの現象に合致する時代を迎えている可能性もあります。現代においては国民ほぼ全てが教育を受ける対象になっていますから、能力低下は国家的規模である可能性もあります。

学生のモラルの高さと順法精神や能力の低さなどと、お前は何を言いたいのだ、と疑問を持たれると思います。しかし、任侠という精神はまさにこの状態に近いもので、法は守らなくてもモラルは守れ、という面があり混乱期に認められやすいものです。（秦末時代や、日本では戦後の混乱期にも現れました。）

モラルの上昇と順法精神や勉学的能力は反比例の関係にあるのでしょうか。

結論は、大学においては、お互いに精神的に格闘する心構えが必要になってきているということです。学生も教員を注意すればいいですし、逆もまた然りです。学問的に論争するのもいいでしょう。

精神的格闘を次世代に伝えていくことが、心を育むことではないかと、最近では愚考いたしております。





北海道で「細菌学若手コロッセウム」やります

北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター感染・免疫部門

助教 大西なおみ

・ 来年 (2014 年) 8 月に、「細菌学若手コロッセウム」を下記の通り開催することとなりました。
細菌学若手コロッセウム (通称:若コロ) は、日本細菌学会「若手研究者育成のためのワークショップ」の支援を受けて 2006 年から毎年開催し、来年度で第 8 回目となります。細菌・アーキア・真菌を研究している若手研究者が合宿形式で集い、各自の口頭発表を通して率直な意見をぶつけあうことで研究者として成長することを目標としています。北海道支部会の皆様におかれましては、一人でも多くの方にご参加いただき、お力添えをいただけますようお願い申し上げます。

会期: 2014 年 8 月 6 日 (水)~8 日 (金)

会場: ホテルニセコいこいの村 (北海道虻田郡ニセコ町 473)

*札幌駅、新千歳空港からの無料送迎バスを用意しています。是非ご利用下さい。

参加費: 一般 未定 (例年 2 万円程度。会期中の宿泊費と食費を含みます)

学生 無料

公式ホームページ: <http://p.tl/ldZO>

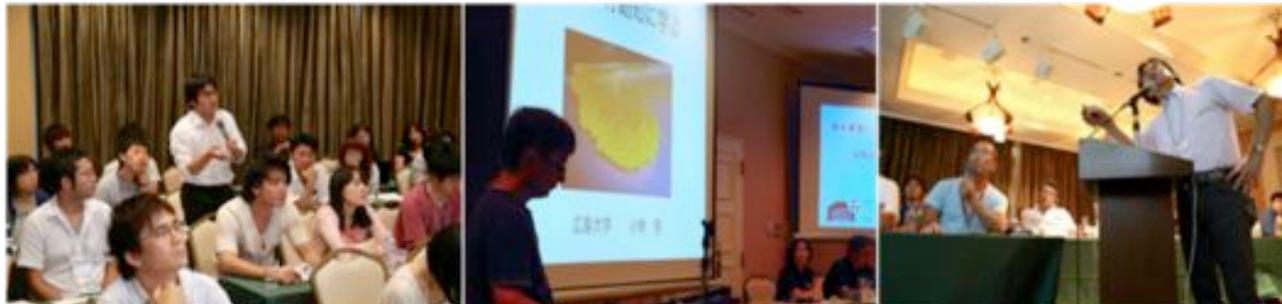
第 6 回および第 7 回の様子をご覧ください。



若コロの基本精神は、「若手研究者が育つこと、そして細菌学分野全体の活性化に貢献すること」です。本会は発足の以来、「細菌に関わる研究」であれば所属学会を問わず参加者を歓迎するという不問律があります。そのため、医学細菌学のみならず、獣医学領域や植物領域、有用細菌の基礎・応用研究、環境微生物や生物モデルとしての細菌学、そして近年ではゲノム科学や微生物統合データベースの構築を推進する研究者、企業からの技術者やマネジメントに携わる多くの人々が参加し、分野横断的に細菌学を議論する場となっています。この場での人との出会いを楽しみ、参加者の研究、さらには自身の将来の糧となるネットワーク構築に役立ててもらいたいと願っています。また、2012 年に東京で開催された第 6 回から、若手研究者の参加をより促すことを目的として、学生参加者は宿泊費食費等一切を含む参加費を無料としています。加えて、学生発表者を対象とした若手奨励賞を設けていることも本会の大きな特徴です。優秀賞受賞者には日本細菌学会総会における発表の機会を与え、若手研究者のキャリア形成の一助となることを目指しています。

2013 年 8 月に広島にて開催された第 7 回細菌学若手コロッセウムの参加者は約 70 名、発表演題は 41

題となり盛会となりました。特別講演には、真性粘菌をモデルとした応用数学でイグ・ノーベル賞を受賞された小林亮博士（広島大学）、細菌を超分子ナノマシンの集合体と捉えた研究でご高名な難波啓一博士（大阪大学）にご講演をいただきました。会場が熱気と興奮で包まれ、夜遅くまで活発な議論が展開される活気のある会となりました。



第7回若コロにて若手奨励賞を受賞した2名が、今年度3月の日本細菌学会総会ワークショップ“目指せ！細菌学の星☆2014”において演題を発表します。このワークショップは若コロを企画・運営する若手研究者が、若コロの基本精神である「若手をエンカレッジし分野全体の成長を目指す」ことを主眼において立案するものです。日本細菌学会のワークショップ規定では、発表者が学会会員であること、とされています。しかし、若手研究者をエンカレッジする目的においては分野全体を有機的に繋ぐプログラム立案が有効と考えます。本ワークショップは学会員以外からも演者を招聘し、他学会との融合を目指した刺激的なプログラム作りを心がけました。是非ご来聴いただき、若コロの楽しさや勢いを感じていただければと思います。

第8回細菌学若手コロッセウムのコンセプトは“全員参加型”を目指しています。初めて1人で参加する若手研究者も、毎年参加しているシニア研究者も、同じ立場で考え行動し、参加者全員で有意義な学術集会を作り上げるための企画を盛り込むべく、鋭意準備を進めております。多くの方のご参加をお待ちしております。

【お問い合わせ先】

北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター感染・免疫部門（担当：大西）

TEL: 011-706-9547, MAIL: wakacolo8th@gmail.com



Higashi



Ohnishi

第8回細菌学若手コロッセウム

世話人： 東 秀明（北海道大学）

ワーキンググループ：

大西なおみ（北海道大学）、鹿山鎮男（広島大学）

田端厚之（徳島大学）、中根大介（学習院大学）

中山秀喜（京都産業大学）、松尾美樹（鹿児島大学）



Nakane



Matsuo



Tabata



Nakayama



Kayama

北海道大学人獣共通感染症リサーチセンターの活動

家畜や野生動物に由来する微生物が原因となって発生する人獣共通感染症を根絶するためには、その発生を予測し、流行を防止する「先回り戦略」が唯一の対策と考えられている。「先回り戦略」とは、原因微生物の起源、自然界における存続のメカニズム、侵入経路、感染機序等の発症と流行に係る種々の要因を明らかにして、世界的流行や蔓延が起こる前に対策をたてることである。北海道大学人獣共通感染症リサーチセンターは人獣共通感染症の克服に向けて、予防・診断・治療法の開発と実用化、情報と技術の社会普及、人獣共通感染症対策専門家の養成に主眼をおいて 2005 年に大学の北キャンパス内の一角(地図参照)に設立された。当初、国際疫学部門、分子病態・診断部門、バイオリソース部門および国際協力・教育部門の 4 部門でスタートした当センターは、その後のザンビア研究拠点の設立、バイオインフォマティクス部門、感染・免疫部門、機器分析・対応室の新設により、6部門、1室、1海外拠点と、ほぼ 2 倍の規模まで拡大している。それぞれの部門のテーマは、以下の通りである。



国際疫学部門: 人獣共通感染症病原体の

伝播経路の解明と自然宿主動物の同定、病原体ゲノムの包括的解析、人獣共通感染症発生状況の把握と流行予測、グローバルサーベイランス

分子病態・診断部門: 人獣共通感染症の診断、病原体の宿主および媒介昆虫特異性を決定する因子の同定、病原性発現機構の解明および治療法創出の基盤技術の確立、迅速・高精度・高感度な病原微生物検出法の開発事業化

バイオリソース部門: 人獣共通感染症病原体および遺伝子、株化細胞、抗体とモデル動物の保存と供給、人獣共通感染症の予防・治療薬の開発およびバイオクラスター、新事業、新産業の創出

国際協力・教育部門: WHO や OIE 等の国内外の研究機関との連絡調整、人獣共通感染症の危機管理人材育成のための教育体制の整備、海外との IT 通信環境整備と研究教育のための IT 基盤整備

バイオインフォマティクス部門: 人獣共通感染症の発生および流行の予測、病原体の遺伝子変異およびタンパク質構造変化の計算機解析、疫学調査で得られる病原体の遺伝子情報のデータベース化

感染・免疫部門: 人獣共通感染症病原体の感染における宿主応答の解析、病原因子および宿主因子の三次元立体構造解析、構造情報に基づいた人獣共通感染症の予防・治療

法の開発

機器分析・対応室: リスクアナリシス/ マネージメントに関する教育および研究、人獣共通感染症対策の立案と実施、人獣共通感染症対策専門家の育成
ザンビア研究拠点: アフリカにおける人獣共通感染症病原体の自然宿主動物の探索と伝播経路の解明、アフリカ地域に「潜在」する未知の病原体の網羅的探索、新興感染症の出現予測と予防



当センターの職員一同は、設立当初から現在に至るまで、各々のテーマを遂行する事により、当センター全体のミッションである「先回り戦略」による人獣共通感染症の克服のために日夜を問わず研究・教育に勤しんでいる。学生を伴って世界の各地に出向いて疫学調査を実施するとともに、独自に開発した診断法を普及させるために活動している。更には、センターで収集した病原体の遺伝子情報を公開するとともに、病原体ライブラリーに納められている病原体を必要に応じて世界に供給している。このような努力の結果として得られた数多くの成果が認められて、当センターは 2011 年 11 月 25 日に人獣共通感染症対策研究協力センターとして WHO から指定を受けた(写真)。

世界の人獣共通感染症と戦い続ける当センターの現在の姿があるのは、センターの設立に尽力し、初代センター長を努め、現在は統括として活躍されている喜田宏先生のご指導の賜物である。

〒001-0020

札幌市北区北20条西10丁目

北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター

国際疫学部門

教授 鈴木定彦

TEL 011-706-9503 FAX 011-706-7310

E-mail: suzuki@czc.hokudai.ac.jp

ホームページ: <http://www.hokudai.ac.jp/czc/>

研究室紹介

札幌医科大学医学部微生物学講座 横田 伸一

札幌医科大学医学部微生物学講座の横田伸一です。本年 9 月 1 日付で教授を拝命し、本講座を担当させていただくことになりました。本当にできたてほやほやの研究室です。とはいってもの私自身は 2000 年に本講座に講師として赴任しておりますので、細菌学会北海道支部会ではいつの間にか古株になりつつあります。

本年 3 月末で約 30 年の長きにわたり本学に勤務された藤井暢弘教授が定年退官され、名誉教授となりました。時を同じくして助教の続佳代先生が北海道文教大学人間科学部看護学科の准教授に栄転されました。

すっかり様変わりした現在のスタッフは私と 2 年半前に秋田大学大学院工学資源学研究科から赴任した山本聡助教、そして本年 10 月 1 日に本学耳鼻咽喉科から小笠原徳子助教と北海道大学大学院農学研究院から白石宗助教が着任して 4 名となり講座らしくなりました。3 名とも大学教員としての職に就くのはこの講座が初めてで本当にフレッシュなメンバーです。さらにスタッフ 4 人のもつ学位が異なります。それぞれが専門とする分野を持ち寄って切磋琢磨して幅広くかつ深い研究が進んでいくことを期待しているところです。大学院生は DC2 の袴田浩さん、社会人大学院生で DC3 の地主勝さん、DC2 の大越康雄さんが在籍しています。また、MD-PhD(学部学生から大学院生として基礎講座に所属する制度)の学生 5 名が籍を置いています。本業が多忙なことであって講座の研究への参加はまだ先送りになっています。

私と秘書の藤川さん以外は新しいメンバーとなりまして、研究室全体を模様替えしようと頑張っています。いろいろと放置状態だったものを次々片づけてすっかりきれいになり、違う研究室に来た感じです。(私も片づけられないように気をつけないと・・・)

研究テーマは基本的にはこれまで私が行ってきたものを継続することになります。これまでウイルス、細菌、免疫分野にわたって多くのものが進行していました。少しはテーマを絞りたいところですが、これは前任の藤井暢弘先生の方針もそうだったのですが、輪をかけてあちこちに手を出す私の性格が災いしてテーマ広がっていく一方になることが危惧されます。今回改訂した大学院の募集要項では本研究室の研究テーマを以下のようにしました。

- 1 病原体関連分子パターン(PAMPs)の構造、生物活性、抗原性
- 2 微生物感染による自然免疫情報伝達系の攪乱に関する研究
- 3 抗菌薬耐性菌の耐性機構及び分子疫学
- 4 抗菌薬が有する抗菌活性以外の薬理作用
- 5 微生物感染における分子シャペロン
- 6 ピロリ菌の感染経路、病原性に関する研究

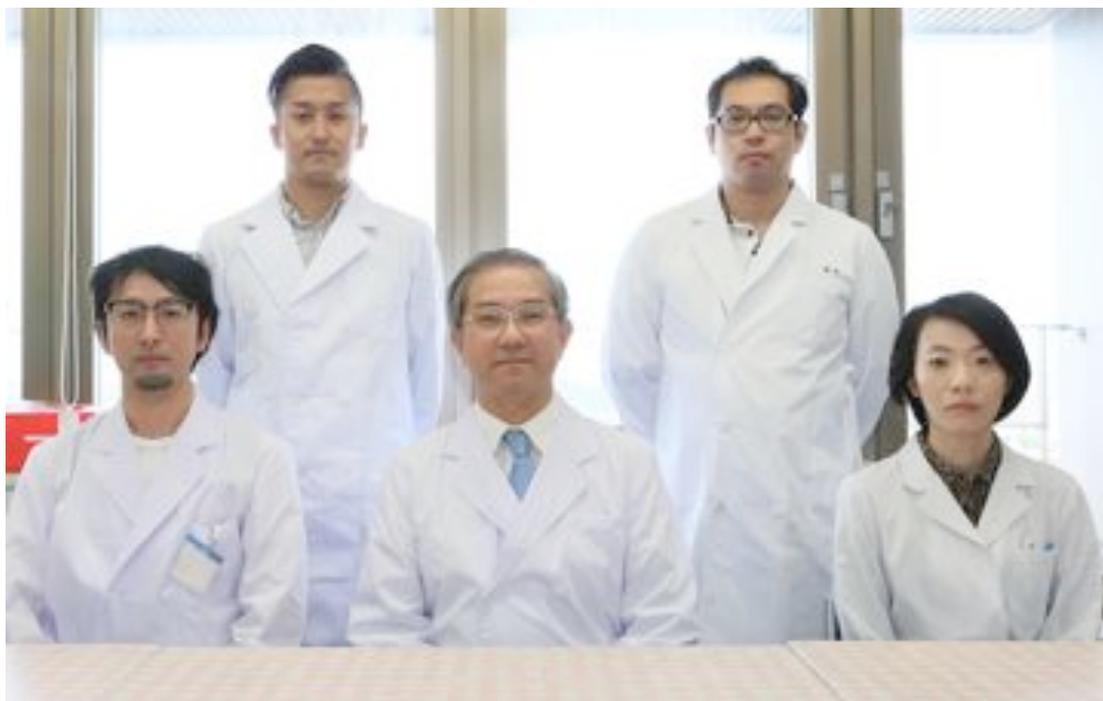
私は常日頃から医学部における基礎医学講座の役割について臨床実学、臨床研究のバックアップが何よりも重要であると強く思っています。臨床の先生方の疑問にお応えする中で、未知なることがあれば私たちの研究室がエビデンスを生み出していくのが理想です。今後も研究室としては細菌、ウイルスにこだわらず、宿主であるヒトと微生物との相互作用(特にその最前線である自

然免疫応答)の面白さを解明していくことを目指します。一方で、抗菌薬耐性菌の薬剤耐性メカニズムの解析研究も推進し、耐性菌の蔓延を起こさない抗菌薬の使い方の提言を基礎の立場で発信できればと思っています。種々雑多なテーマの中でも研究室の目指すところは「ヒト(あるいはヒト社会)と微生物の関係はどのようにあるべきか」に集約されると思います。

教育の方は学部では講座として第2学年と第3学年にわたって実施される「微生物学」の講義と「微生物学実習」をコーディネートしています。今年の実習はこれからですが助教/大学院生の実習部隊が充実していますので私は左団扇で経過を見守ればよさそうです。講義の方は、細菌学全般を私が担当し、ウイルス学は当面従来通り2名の非常勤講師の先生と藤井名誉教授にも非常勤講師として担当していただくことになっていますが、臨床実習の時間を拡大した新カリキュラムも来年度の新入生からスタートすることですし、これを機に見直しをかけたいと思っています。約一ヶ月にわたる第4学年の基礎講座での実習(基礎配属)ですが、例年数名(4名前後)の学生さんが本講座を希望してくれています。ここ数年スタッフ不足で受け入れに苦慮していたのですが、若い先生方が増えて今年からは充実したものにできそうです。

基本的には、研究室は自由な(いい意味でゆるい)雰囲気というのを大事にしたいと思っています。研究のアイデアを考えるそしてひらめくのは時間と気持ちに余裕のあるときというのが私の経験からくる持論です。一方で切羽詰ってはじめて出てくるものもありますが。文献紹介を中心としたセミナーや研究進捗状況の報告会(プロGRESS)はこれまで必ずしもうまく回っていませんでしたが、ここは気合を入れて充実させたいところです。以前から教室では昼食を講座のセミナー室でとる習慣があり、今のメンバーにも浸透してきています。本当に他愛のない雑談をしながらですが、ひょんなところから出てくる研究のヒントや各々の経験や知識を語り合う貴重な情報交換の場になっています。これはいい習慣として継続したいと思っています。

「桃李もの言わざれども下自ら蹊を成す」といいますが、研究室スタッフの協力のもと多くの人に魅力を与え、何かちょっとした疑問をお持ちの先生方や学生さんたちが私たちのもとに集まってくれるような研究成果と教育を提供できる研究室を目指して頑張っていきたいと思っています。



研究室紹介

北海道文教大学人間科学部

北海道文教大学人間科学部 健康栄養学科 木村浩一

北海道文教大学人間科学部には、健康栄養、理学療法、作業療法、看護、こども発達の5学科があります。本年度、最後に開設されたこども発達学科もようやく全学年が揃い、人間科学部が一応完成したことになります。現在、再来年度の大学院設置を目指し、各種手続きを進めています。本学は、1942年に北海道女子栄養学校として始まりましたが、4年制大学としての歴史は比較的新しく、1999年の外国語学部開設がスタートになります。人間科学部は、4年後の2003年に健康栄養学科が開設されたのが最初で、その後2010年までに現在ある5学科が次々と開設されました。それぞれの学科では、国家資格（管理栄養士、理学療法士、作業療法士、看護師）の受験資格や教員資格を取得することが出来ます。

私が本学人間科学部の作業療法学科に着任したのは、作業療法学科が開設された2007年でした。大学としての開始が文系の外国語学部であったことかもしれませんが、本学では大講座制が採用されており、各教員が独立した立場にあります。教授、准教授といった職制はもちろんありますが、准教授が教授の部下ということではなく、研究については各自の責任において自由に行うことが原則です。もちろん、教員同士が研究チームを作って共同研究することもあり、それを支援するために学内共同研究費という制度も用意されています。教員は基本的に各学科で受験資格を取得出来る国家資格の有資格者が中心で、管理栄養士、理学療法士、作業療法士、看護師など約100名おります。

私が着任して驚いたのは、大学としてのスタートが文系学部だったことが原因なのか、理系の大学では当たり前が存在する実験室・研究室が存在しないということでした。各教員には原則、専用の個室が与えられ、それを研究室と称していますが、これは試料ならぬ資料分析が主体になる文系の研究を念頭に置いたもので、本棚、両袖の大きな机、それに学生との面談に使用する会議テーブルが部屋の中にドーンと設置されていました。広さはそれなりにあるので、実験機器を持ち込もうかとも考えましたが、電気容量も給排水設備も機器の稼動にはとても耐えられず断念せざるを得ませんでした。もちろん外国語学部教員のお部屋の中は、本が一杯に詰まった本棚がいくつも置かれ、まさに研究室と言える雰囲気です。その代わりという訳ではないのですが、人間科学部の方には学生実習室があり、私が赴任した作業療法学科にも木工室や織物室などの部屋があります。残念ながら細菌を扱うことは出来ませんが。実習室は他の学科も含めると、日常動作訓練室、装具加工実習室、看護学実習室、音楽室など全部で25室ほどあります。中でも健康栄養学科には、調理実習室や食品加工実習室など、私には目新しい実習室がいくつもあります。

この様な環境なので、各教員ともアンケートを主体とした疫学調査や、運動機能の計測など、学内の実習室を最大限活用した研究を行っています。もちろん学生実習室なので、実験出来るのは実習の空き時間と、早朝・夜間に限られます。私も木工室で、視覚障害者

用の超音波レーダーや、雪を利用した発電装置の開発など、殆ど工学部の様なことを毎晩行っていました。実は、健康栄養学科の実習室には、学生実習用に微生物を扱う設備が揃っており、私は着任直後に使用を願い出たのですが、やんわりと断られてしまいました。考えてみれば、健康栄養学科は皆さん食品関係の先生方ばかりですから、私のことを知っている筈もなく、怪しい人間が突然実習室を使わせろと言っても断られるのは当然でした。ようやく本年度、私の所属が作業療法学科から健康栄養学科になり、これらの実習室を使えるようになりました。ただ、本学には現在のところ研究のために倫理委員会は設置されていますが、遺伝子組換えや動物実験に対する審査を行う委員会が存在していません。ですから、細菌の研究を本格的に始めるには、実験指針の作成を含め、これら委員会の整備から手を付けなければなりません。これまでは、遺伝子組換えなどの実験を行おうという教員は私しかいなかったのですが、幸い昨年度より、本学会北海道支部会評議委員の大山徹先生が本学健康栄養学科に着任されたことにより、これら委員会の整備も2人で力を合わせて行うことが出来るようになりました。最初に書いた通り、再来年度には大学院設置も予定されており、これまで教育中心だった本学も、いよいよ研究を本格的に行う環境が整いつつあります。現在、大山先生は健康栄養学科の学科長で、しかも大学院設置準備委員会の副委員長も務められており、多忙を極めるなか、研究環境整備への学内の期待を一身に受け奔走する毎日を過ごしておられます。



日本細菌学会北海道支部会則

総 則

1. 本会は日本細菌学会北海道支部という。
2. 本会は北海道在住の細菌学関係研究者によって組織される団体である。
3. 本会は細菌学領域の進歩を促進することを目的とする。
4. 本会の目的を達成するために次のような事業を行なう。
 - イ. 学術集会（学術総会・集談会等）の開催
 - ロ. 日本細菌学会本部との連絡
 - ハ. 国内の関係諸機関諸学会との連絡
 - ニ. その他必要と認められる事業

会 員

5. 本会の趣旨に賛成する人は会員となることができる。
6. 会員は会費を納めなければならない。
7. 会員はその業績を学術総会において発表することができる。
8. 会員は評議員 1 名以上の賛成を得た上で本会の運営に関する議案を評議員会に提出することができる。
9. 本会の趣旨に賛同し、本会の活動を援助するために、毎年一定の賛助会費を納めた団体あるいは個人を賛助会員とする。

役員及び役員会

10. 本会に次の役員をおく。

支部長	1 名	評議員	若干名	庶務係	1 名
会計係	1 名	幹事	若干名	会計監事	2 名
11. 次期支部長は現評議員の互選に基づきこれを定め総会において了承を得る。
12. 新評議員は会員の中から、支部長がこれを委嘱する。
13. 会計監事、幹事、庶務係及び会計係は会員の中から支部長がこれを委嘱する。
14. 支部長、幹事、庶務係ならびに会計係は会計監事になることができない。
15. 支部長は本会を代表し、会務を統括する。
16. 評議員は支部長の選出のほか、本会の事業の企画、立案、運営等について評議する。
17. 評議員会の議事は、出席者の過半数を持って決せる。但し、可否同数の場合は支部長の判断により決する。
18. 幹事は支部長を補佐する。
19. 会計監事は本会の会計を監査する。
20. 評議員会及び幹事会は支部長が召集する。
21. 役員任期は 2 年とし再任を妨げない。
22. 役員に欠員を生じた場合の後任役員の任期は、前任者の残任期間とする。

集 会

23. 支部総会及び学術総会は、原則として年に 1 回開催される。
24. 支部総会において支部長は会務の報告を行なう。
25. 本学会の運営の基本に関する事項及び本会則の変更は、会務総会において出席者の過半数の賛同によって決定する。

26. 時宜に応じて他の学会、研究会等と合同して集会を開催することができる。
27. 総会長は、原則として学術総会の一般演題より優秀な発表を選出し表彰しなければならない。その名称を日本細菌学会北海道支部会賞とする。ただし表彰の内容は総会長に一任する。

学術総会長

28. 学術総会長は、評議員会で推薦し、支部総会で決定する。

会 計

29. 本会の経費は会費及び賛助会費、日本細菌学会からの補助金、その他の収入をもってこれに充てる。
30. 本会の会計年度は1月1日に始まり12月31日に終わる。
31. 会計監事はこの会の会計の監査を行うものとする。

事務所

32. 本会の事務所は支部長所在の機関に置くものとする。

付 則

33. この会則は平成3年2月27日より施行する。
34. 会則の変更は評議員会の議決により支部総会の承認を必要とする。
35. 支部会員会費は年額1,000円とする。賛助会費は一口10,000円とする。
36. 講師謝礼金
 - イ・集会の講師に対する謝礼金及び旅費を支出することができる。
 - ロ・集会の講師謝礼金は、北海道在住の講師については2万円、その他の講師については3万円とする。
 - ハ・講師謝礼金の変更は評議員会及び総会でこれを報告しなければならない。
37. 学生研究奨励金
 - イ・北海道支部学術総会開催地と発表者が所属する大学・大学院とが遠隔である場合、助成金として1万円を支部会幹事・評議員会の審議を経て支給する。
 - ロ・対象者は大学学部学生と大学院生とする
38. この会則は平成10年1月1日より一部改正施行する。
39. この会則は平成14年1月1日より一部改正施行する。
40. この会則は平成16年1月1日より一部改正施行する。
41. この会則は平成24年1月1日より一部改正施行する。
42. この会則は平成25年1月1日より一部改正施行する。

日本細菌学会北海道支部学術総会歴代開催記録

回	開催年月日	総会世話人／総会長	総会開催場所
18	1961.2.17		北海道大学医学部講堂
19	1961.11.28		北海道大学農学部新館
20	1962.2.17	植竹久雄 (北海道大学医学部)	札幌医科大学西第2講堂
21	1962.11.17	飯田広夫 (北海道立衛生研究所)	北海道立衛生研究所
22	1963.2.23	山田守英 (北海道大学医学部)	札幌医科大学西第2講堂
23	1963.12.6	植竹久雄 (北海道大学医学部)	北海道大学農学部本館中講堂
24	1964.2.22	平戸勝七 (北海道大学獣医学部)	北海道大学獣医学部
25	1964.12.4	林 喬義 (札幌医科大学医学部)	札幌医科大学西第3講堂
26	1965.2.19	三浦四郎 (北海道大学獣医学部)	田辺製薬ビル 6F
27	1965.12.3	飯田広夫 (北海道立衛生研究所)	北海道立衛生研究所
28	1966.2.18	伊藤英治 (北海道大学理学部)	
29	1966.12.9	大原 達 (北海道大学結核研究所)	田辺製薬ビル 6F
31	1967.12.9	林 喬義 (札幌医科大学医学部)	札幌医科大学西第3講堂
32	1968.2.23	飯田広夫 (北海道立衛生研究所)	札幌医科大学西第3講堂
33	1968.12.6	山田守英 (北海道大学医学部)	武田ビル
34	1969.2.27	高橋義夫 (北海道大学結核研究所)	武田ビル
35	1969.12.12	三浦四郎 (北海道大学獣医学部)	武田ビル
37	1971.1.22	飯田広夫 (北海道大学医学部)	武田ビル
38	1972.2.26	大原 達 (北海道大学結核研究所)	ムトウビル 6F 講堂
42	1974.9.27	林 喬義 (札幌医科大学医学部)	ムトウビル 6F 講堂
43	1975.9.26	林 喬義 (札幌医科大学医学部)	ムトウビル 6F 講堂
44	1976.9.17	熊谷 満 (北海道立衛生研究所)	北海道立衛生研究所共用東講堂
45	1977.9.30	熊谷 満 (北海道立衛生研究所)	ムトウビル 6F 講堂
46	1978.9.29	鈴木 武 (北海道大学歯学部)	北海道立衛生研究所共用東講堂
47	1979.9.22	鈴木 武 (北海道大学歯学部)	北大歯学部講堂
48	1980.9.26	梁川 良 (北海道大学獣医学部)	ムトウビル 6F 講堂
49	1981.9.17	梁川 良 (北海道大学獣医学部)	ムトウビル 6F 講堂
50	1982.9.17	山本健一 (北海道大学免疫科学研究所)	ムトウビル 6F 講堂
51	1983.9.9	黒田収子 (北海道薬科大学)	
52	1984.10.26	飯田広夫 (北海道大学医学部)	ムトウビル 6F 講堂
53	1985.9.13	飯田広夫 (北海道大学医学部)	ムトウビル 6F 講堂
54	1986.9.19	伊佐山康郎 (家畜衛生試験場北海道支場)	ムトウビル 6F 講堂
55	1987.9.25	小熊恵二 (札幌医科大学医学部)	ムトウビル 6F 講堂
56	1988.10.21	小熊恵二 (札幌医科大学医学部)	大通り公園ビル(ヤクルト)会議室
57	1989.9.29	宮川栄一 (家畜衛生試験場北海道支場)	家畜衛生試験場北海道支場会議室
58	1990.9.28	宮川栄一 (家畜衛生試験場北海道支場)	
59	1991.11.15	皆川知紀 (北海道大学医学部)	ムトウビル 6F 講堂
60	1992.11.20	皆川知紀 (北海道大学医学部)	北海道大学百年記念会館講堂
61	1993.11.13	平棟孝志 (酪農学園大学獣医学部)	酪農学園大学獣医3号館
62	1994.10.29	中島良徳 (北海道薬科大学薬学部)	北海道薬科大学
63	1995.10.7	馬場久衛 (北海道医療大学歯学部)	北海道医療大学 P1 講堂
64	1996.9.21	江口正志 (家畜衛生試験場北海道支場)	農林水産省北海道農業試験場
65	1997.10.25	渡邊継男 (北海道大学歯学部)	北海道大学術交流会館
66	1998.10.24	都築俊文 (北海道立衛生研究所)	北海道立衛生研究所講堂
67	1999.10.23	藤田晃三 (札幌市衛生研究所)	札幌市衛生研究所
68	2000.9.28.29	中根明夫 (弘前大学医学部)	弘前大学医学部
69	2001.10.27	絵面良男 (北海道大学水産学部)	北海道大学水産学部
70	2002.10.26	菊池直哉 (酪農学園大学獣医学部)	酪農学園大学学生ホール
71	2003.9.14	大山 徹 (東京農業大学)	東京農業大学
72	2004.9.3	藤井暢弘 (札幌医科大学)	札幌医科大学記念ホール
73	2005.9.17	柴田健一郎 (北海道大学)	北大学術交流会館
74	2006.9.2	磯貝 浩 (札幌医科大学)	ムトウビル 6F 講堂
75	2007.9.8	中澤 太 (北海道医療大学)	北海道医療大学サテライトキャンパス
76	2008.9.6	鈴木定彦 (北海道大学)	北大獣医学研究科付属動物病院講堂
77	2009.9.18	山口博之 (北海道大学)	北海道大学百年記念会館
78	2010.9.3-4	田村 豊 (酪農学園大学)	北海道大学百年記念会館・酪農学園大学学生ホール
79	2012.8.28-29	川本恵子・倉園久生 (帯広畜産大学)	とちがちプラザ 2F 視聴覚室
80	2013.8.30-13	丹羽光一 (東京農業大学)	東京農業大学生物産業学部

日本細菌学会北海道支部 平成25-26年度新役員・名誉会員名簿

評議員

磯貝浩	札幌医科大学医学部動物実験施設部
大山徹	北海道文教大学人間科学部健康栄養学科
川本恵子	帯広畜産大学動物食品衛生研究センター
倉園久生	帯広畜産大学畜産衛生学研究部門食品衛生学分野
菊池直哉	酪農学園大学獣医学部感染・病理教育群獣医細菌学ユニット
小林宣道	札幌医科大学医学部衛生学講座
相根義昌	東京農業大学生物産業学部食品香粧学科
柴田健一郎	北海道大学大学院歯学研究科口腔病態学分野口腔分子微生物学
杉本千尋	北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター国際協力教育部門
鈴木定彦	北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター国際疫学部門
田村豊	酪農学園大学獣医学部衛生・環境教育群食品衛生学ユニット
中澤太	北海道医療大学歯学研究科口腔細菌学
山口敬治	元北海道立衛生研究所・細菌
山口博之	北海道大学保健科学研究院病態解析学分野感染制御検査学 (支部長)
横田伸一	札幌医科大学医学部微生物学

幹事

木村浩一	北海道文教大学人間科学部健康栄養学科
高橋樹史	酪農学園大学獣医学部感染・病理教育群獣医細菌学ユニット
高橋晃一	札幌医科大学医学部動物実験施設部
丹羽光一	東京農業大学生物産業学部食品香粧学科
松尾淳司	北海道大学保健科学研究院病態解析学分野感染制御検査学
安田元昭	北海道大学大学院歯学研究科口腔病態学分野口腔分子微生物学

会計幹事

鎌口有秀	北海道医療大学歯学研究科口腔細菌学
小華和柗志	北海道大学大学院医学研究科医学教育推進センター

理事

菊池直哉 (平成24年度~)

評議員 (平成24年度~)

磯貝 浩、菊池直哉、倉園久生、柴田健一郎、山口博之

名誉会員

林 喬義、梁川 良

編集後記

第80回日本細菌学会北海道支部学術集会在大盛況であったことを大変嬉しく思います。これも一重に総会長の丹羽先生、渡部先生、相根先生さらにスタッフの方々のご尽力のおかげ、支部会会員を代表して厚く御礼申し上げます(蟹の食べ比べは生まれて初めての経験でした!)。支部会HP(<http://www.jsb-hokkaido.net/>)「支部学術総会のお知らせ」に”終了のご挨拶”へのリンクが貼ってありますのでご覧ください。来年は横田先生が総会長として札幌にて開催されます。アイデア満載の素晴らしい学会になることでしょう!! 多いに期待しています。宜しく申し上げます。

さて大変お忙しい中、原稿のご執筆を快くお引き受けいただきありがとうございました。当初の予定より遅くなりましたが皆様のご協力のおかげで北海道支部22号を配信することができ安堵しています。丹羽先生、相根先生、渡部先生には、大盛況だった第80回支部学術総会の舞台裏を。特集「人」では、田村先生に「酪農学園大学創立者 黒澤西蔵先生について」、小華和先生には「大学と人の心をはぐくむということ」を。支部会賞を受賞された方々の喜びの声。大西先生には来年度ニセコで開催される「細菌学若手コロッセウム」のご紹介を。また鈴木先生、横田先生、木村先生には、北大人獣リサーチセンター、札幌横田研究室、北海道文教大学人間科学部のご紹介をそれぞれしていただきました。盛り沢山の内容となっています。ぜひご覧ください。次号は来年になりますが、何か企画がございましたら特別号も可能です。会員の皆様からの寄稿をお待ちしています。

支部幹事・評議員全てが一丸となって若い世代が魅力を感じる支部会を目指します。どうぞ宜しくお願いいたします。会員の皆様あつての支部会。皆様のアイデアをお待ちしています。

平成25年 12月

北海道大学大学院保健科学研究院病態解析学分野 山口博之

